

ほのぼの

第17号

平成19年
11月

発行

神戸市須磨区戎町1-2-3
TEL 078-732-5209
信行寺門信徒会

報恩講 いのち尊し



報恩講は、浄土真宗の信者にとりまして一番大切な法要です。約七五〇年前、親鸞聖人がご往生された後、ご命日に聖人を宗祖と仰ぐ者が集い、聖人の九〇年のご苦勞をしのび、そのご苦勞の中でお示しくださった阿弥陀如来のお救いを、心を新たに、受けとめさせていただく法要を今日にいたるまで勤め続けております。ご本山西本願寺では一月九日より十六日にわたってつとめられています。

報恩とは、恩に報いるということです。恩とは、わたしの「いのち」に与えられている「めぐみ」です。その「めぐみ」に応えることが報恩です。具体的にいいますと「仏になる道を開いてくださった」ということです。

よくよく考えてみますと、わたしたちは親をはじめとして、どれだけの人々に支えられてきたであろうか。そのおかげで今日の自分があるのに、自分ひとりで生きているように思いこんでいる。ただなんとなしに生きてむなしさを感じ、「何のために生まれ、生きてきたんだろう」と自問自答する。しかし、納得できる答えは見いだせない。「どうしたらいいんだろうか？」

これにたいして親鸞聖人は、「阿弥陀さまの浄土に生まれる道を聞くために生きてきたんだ。阿弥陀さまがまちがいなく仏にしてくれるヨ。これからもお念仏を聞いて生きてゆきなさい」と、お示しくださいました。

これに応える人生を歩むことが報恩です。親からは、「限りあるいのち」をもらいました。さらに親鸞聖人のお導きによって、これまでは全く手の届かなかった「無量寿のいのち」を阿弥陀さまからいただくことのできる人生が、わたしの上に開かれたのです。

親にもらった「いのち」を無駄にせず、変わることをない人生の目標を明らかにして、「いのち尊し」を伝えてくださった御恩に応え、お念仏を聞きましょう。

(住職)

第25回夏期特別法座

住職

(於須磨シーパル)

平成19年8月17日(金)例年の夏期特別法座が須磨・シーパルで開催されました。今回は第25回の節目でもあり、開会の挨拶をされた門信徒会長の谷川さんが、60歳の頃の発足とお聞きして、時代の重みを感じました。



私たちが仏教にかかわっていく上で、仏教に何を求めていくか、問題になるわけです。即物的に現世の利益を求めていく教えもある中で、親鸞聖人は「人とはどういうものか」を追求されて、龍樹菩薩をはじめ七高僧の教えを受け、他力の信心のほかは救われる道はないと、浄土真宗の教えを開かれたのです。浄土真宗には十種の利益があるといわれています。「現生正定聚」とは、今現在において往生浄土が約束された身になれるということ。これは真宗の要(かなめ)を言っております。

人がものを見る基準は、その人の知識、生きた年代、生きてきた環境によって様々です。

「人の知識ほど頼りにならない」ものはありません。外からの影響によってころころ変わるものなのです。そして自分という

ものが分らないのです。地震で家が倒壊した。住む所が無くて困っておいたら、国が仮設住宅を建ててくれた。その時は有り難いと喜んでいたのに、いざ入居という時に不満がでてくる。あの人は家族が少ないのに広い住宅に入居して、私はこんなに大勢の家族なのに不公平だと言う。「救い」である仮設住宅が、愚痴という苦しみにもなるのです。自分の幸せというものが分らない。他人と較べて自分はどうかという基準でしか自分が分らないのです。仏の教えはそのような自分を明らかにしてくれるのです。



恒例の「みやび会」の合唱も、日を追う毎に技術が向上して、二部形式や輪唱を交えて磨きがかかってきたようです。懐かしい童謡に昔を思い出、ふと胸が熱くなるひとときです。

秋の彼岸法要法話

九月十五日・高田慈昭先生

九月十六日・信行寺 住職



お釈迦様については、二つの見方があります。一つは人間としてのお釈迦様。お釈迦様はインドの王家の子息として、現実はこの世に人として二十九歳まで伽耶城で生活されておりました。もう一つは「四門出遊」によって出家され、悟られたお釈迦様、この覚者のことを仏陀と呼んでおります。では何をお説きになった

のかと言いますと、「縁起」の法を説かれた。すべてのものが関わりがあり、この法からはずれて存在しないという相関関係を説かれたのです。仏教は人間を超えた教えです。人知の及ばない世界を説いております。私たちはその教えを通して、自己とは何か、そしてこの身はどうなるのか、何処を目指して生きるのかを学ばせていただくのです。

當麻 曼荼羅に見る浄土の世界

秋の彼岸法要二日目は、当麻寺に伝わる當麻曼荼羅のお話を住職からお聞きしました。不遇の身から世をはかなんで出家された中将姫の物語、さらに幼い頃に死別した母への供養のため、千駄の蓮の茎で織ったといわれる曼荼羅の由来など、初めて聞くお話でした。

この曼荼羅に描かれている物語は、「観無量寿經」に書かれている「韋提希夫人」がお釈迦様に救いを求める場面を、汚濁に満ちた人間界と対照的に、清浄な浄土の世界を説いております。

最近、十五歳や十六歳の少女が斧で父親を害する事件が続いて起きました。王を殺され、自分も幽閉されて嘆き悲しむ韋提希夫人の姿そのままが、現代にも受け継がれていることに慄然とします。「どうして自分がこのような目に遇うのでしょうか」とお釈迦様に訴える韋提希夫人、縁起の道理を論じて浄土往生の道を説くお釈迦様、お彼岸の法話としてこれほど身につまされるお話はありませんでした。

(編集部)

和歌の浦曲（うらわ）の 片男波（かたおなみ）の
よせかけよせかけ 帰ることく
われ世に繁（しげ）く 通いきたり
みほとけの慈悲（じひ） つたえなまし

「報恩講の歌」が聞こえてきました。どこ
かで報恩講が勤められているようです。

親鸞聖人は私たちに仏さまの教えを伝える
ために、たいへんご苦労されましたが、
弘長二年（一二六二）十一月二十八日
（新暦一月十六日）念仏の声とともにご往
生されました。報恩講は聖人のご威徳に
感謝して営む法要です。

聖人は別れを悲しんでいる人たちに、
こう諭されたと伝えられます。「私はこの
世の命がきわまつてお浄土へ帰るが、ちよ
うと和歌の浦の浜辺に波がつきからつき
へと打ち寄せるように、仏さまのお慈悲
を伝えるために、私はお浄土から帰って
くる」

その一人こそ親鸞なれ

一人居ても喜びなば
二人と思え 二人にして
喜ぶおりは 三人なるぞ
その一人こそ親鸞なれ

「報恩講の歌」は

まだ続いています。

（辻本敬順著

仏教名言ノートより）

桔梗

釜江正巳

きりきり しゃんとして

咲く桔梗かな

一茶

たおやかな茎の頂きに、凛として咲く青紫の花は一際鮮やか。
江戸中期の俳人森川許六は「野草のなかにおもひもかけず咲き
出たるは、田舎家の草の戸にたたずむ、良き娘見たる心地ぞ
する」と書いている。桔梗色の純粹な佇まいは、きつぷのよい
小股の切れ上がった江戸美人を彷彿させる。

また、つぼみは袋状で、その空洞に先祖の靈魂が宿ると信じ、
仏花とする風習がある。

「桔梗紋」は名門武將が多く家紋に採用、本能寺を襲った明
智光秀は「水色桔梗紋」。

時ならぬ 桔梗が咲いた本能寺

一方、江戸城を創設した太田道灌の家紋も桔梗。

今も内桜田門を

「桔梗門」と呼んで

おり、彼の榮譽を讃
える門名となつて
いる。

（カット・月田）



初めての永代経法要

田川 一夫

「あ、彼女（私は妻のことをこう呼んでいた）の名前を見た途端、ぐあーと胸が詰まり一気に涙が溢れてきました。思えば平成十七年の五月、C型肝炎による肝臓癌と診断され、手術は不能、よく持って余命は一年と宣告された時は、「こんなに元気な彼女が何でー」と信じるのができませんでした。

二人の息子は夫々独立し、私たち夫婦は、妻の友人三組で、映画鑑賞、食事会、スナック、旅行と晩年の人生を楽しく過ごしておりました。妻に先立たれた私にとっては、今は儚い思い出ししかありません。

幾度となく入院をくり返し、私も妻に付き添って介護しましたが、病状は悪くなる一方、最期は薬も食事も受つけなくなり、両足の血管に点滴を打つ有様。我慢強い彼女もさすがに歯を食いしばっていました。死の近いことを悟ったのか、いつもの会話の後、私の目を見つめて、「お父さん……ありがとう」と言ったのが彼女の最期の言葉でした。こんなに医学が発達しているのに、妻の命を留める術（すべ）も知らない治療に腹が立ち、悔しくてやりきれない思いがしました。

親の代からご縁をいただいていた信行寺さんに通うようになったのは、去年の暮の「定例開法の集い」からでした。流罪になられた親鸞聖人のご旧跡である越後への参拝旅行にも参加させていただきました。老人ばかりで暗い雰囲気を用意していましたが、皆さんの気持ちは若く、それにお元気なのは驚きました。日頃から住職さんの法話に導かれ、浄土に往生できると信じるのが、何の心配もない気持ちに表れるのでしようか。「信心とはすごいなー」私もお念仏を喜ぶ仲間に入れていただいて、浄土で彼女に遇う日を楽しみに、精いっぱいこの世でがんばります。



ながい間お世話くださいました

門信徒会 副会長の

松井 孝様が

八月十二日 往生されました

大阪城東区より

栄照寺の皆様が参拝

秋晴の十月二十三日、栄照寺仏教婦人会・二十七名の方が、信行寺にお参りに来られました。

本堂では、おつとめのあと、住職から、震災からの再建に至るまでの道のりの説明をうけ、その後「法話」がありました。



引き続き礼拝堂で信行寺みやび会の皆様と一緒に「念仏」「千の風」など仏教讃歌を歌い、楽しいひとときを過ごしました。

はじめてお会いした方々でも、お念仏のお導きにより、心が通じあつたものと思います。

最後に、長井副会長から挨拶があり、感謝の気持ちをお伝えしました。

八さん ご隠居居つてかい。
ご隠居 誰かと思えば八さんじゃないか。まあお上がり。
八さん 今日はご隠居に聞きたいことがあってネ。
ご隠居 どういうことかな。
八さん 明日お寺で報恩講があつてね。お供えを持っていきたいと思ってるのよ。
ご隠居 それはご奇特な。
八さん あのお供えというのは仏壇に向かってどっち向きに供えるもんかね。歳暮や中元は相手の手前が贈る方の名前があるように渡すがね。
ご隠居 それは相手が人だからで、仏様はそんなことはお見通し、そんなことを悩む人間を笑うてござる。どっち向きであろうとも問題はそれを与える人の気持ちがどうかということよ。本当に感謝して敬う気持ちが大事。それに八さん、お前さんが私のところへ手土産や歳暮を持って来る時に「つまらねえ物ですが」というのはやめた方がいい。
八さん でもご隠居。世間では皆そう言ってますが。
ご隠居 世間は世間、お前さんがそう言うて、本当につまらない物に見える。
八さん それは手きびしい。
ご隠居 お供えでも布施でも喜捨というてな。喜んでくれるもので、してやったと思つたら何もなんのだよ。

落語 長屋法談

(M)

趣味

いけ花展によせて

長井輝葉



5月下旬、久々に未生流「方雲会流展」が、さんちかホールで催されました。初代家元に入門してから六十有余年になり、二代目家元になって初めての流展に参加させて頂き、よくぞここまで在籍したものと感無量です。風邪で体調不良の中、古くからのお仲間、腰高先生との二人席を無事に努めました。

信行寺からは、永代経法要の勤まっている中を、御住職坊守様をはじめ二十名近くの方々のご来場を賜り華を添えていただきました。



花材は夏はぜの木とリアトリスです。
花器は清水焼の一品物を使用しました。

法座のご案内

◎報恩講法要

十二月十五日(土) 午後二時より

講師 浅井成海先生

(龍谷大学名誉教授)

十二月十六日(日) 午後二時より

講師 信行寺住職

◎新春初法座

一月五日(土) 午後一時より

法話 信行寺住職

※お勤め法話の後、恒例の会食を

ご一緒に

◎護法会法座 毎月第一日曜日

午後二時より

◎仏教講座 毎月第二日曜日午後七時

◎定例開法の集い 毎月第三土曜日

午後二時

みやび会コーラス♪

※ 毎月第三土曜日午前十時より

仏教讃歌の練習をしています。

心安らぐひと時、ご一緒に歌い

ませんか。

ご本山秋の御堂演奏会

(十一月二十三日) に参加します

仏具等寄贈いただきました

◎礼拝堂用 五具足

菊輪灯

華瓶

施主 二 篤信者

◎當麻曼荼羅掛図 一幅

七条袈裟

施主 濟陽キミコ

◎上履きスリッパ 二百足

施主 新田泰三

有難うございました。

編集後記

早いもので、十七号の発行となりました。

発行のたびに、新鮮味を出したいと一同がんばっています。

今回は十二月の報恩講という仏事について、住職様に分りやすく解説いただきました。ご縁をいただいた一人ひとりが、そのご恩を大切に味あわせていただきますように。

恒例のシーバルでの夏期法座も大勢参加され、三月号に記載いたしました、三男秀爾さんご夫妻のおひろめを兼ねた昼食会、和やかな雰囲気でご馳走になりました。信行寺も、三兄弟それぞれ道の道に進まれ、末永く発展されますよう、心よりお慶び申し上げます。
(泉井記)